

今は昔、たよりなかけける女の、清水にあながちに参るありけり。年月つもりけれども、露ばかり、そのしるしと覚えたることなく、いとゞたよりなくなりまさりて、果は、年ごろ有ける所をも、其の事となくあくがれて、よりつくところもなかりけるまゝに、泣く泣く観音を恨み申して、「いかなる先世のむくひなりとも、たゞすこしのたより給候はん」と、いりもみ申して、御前にうつぶし臥したりける夜の夢に、「御前より」とて、「かくあながちに申せば、いとほしくおぼしめせど、すこしにてもあるべきたよりのなければ、そのことをおぼしめし歎くなり、これを給はれ」とて、御帳のかたびらを、いとよくたゞみて、前にうち置かると見て、夢さめて、御あかしの光に見れば、夢のごとく、御帳のかたびら、たゞまれて前にあるを見るに、さは、これより外に、たゞべき物のなきにこそあんなれと思ふに、身のほどの思ひ知られて、かなしくて申すやう、「これ、さらに給はらじ。すこしのたよりも候はば、にしきをも、御帳には縫いて参らせんとこそ思候ふに、この御帳ばかりを給はりて、まかり出づべきやうも候はず。返し参らせさぶらひなん」と申して、いぬふせぎの内に、さし入れて置きぬ。又まどろみいたる夢に、「などさかしくはあるぞ。たゞ給はん物をば給はらで、かく返し参らす。あやしきことなり」とて、又給はるとみる。さてさめたるに、又おなじやうに前にあれば、なくなるかへし参らせつ。かやうにしつゝ、三たび返し奉るに、猶またかへし給びて、はての度は、この度かへし奉らんは、無禮なるべきよしを、いましめられければ、かゝるとも知らざらん寺僧は、御帳のかたびらを、盗みたるとや疑はんずらと、思ふも苦しければ、まだ夜ふかく、ふところに入れて、まかり出でにけり。これをいかにとすべきならんと思ひて、ひき広げて見て、着るべき衣もなきに、さは、これを衣にして着んと思ふ心つきぬ。これを衣にして着てのち、見ると見る男にもあれ、女にもあれ、あはれにいとほしきものに思はれて、そゞろなる人の手より、物をおほく得てけり。大事なる人のうれへをも、其衣をきて、知らぬやんごときな

1 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べること。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。駒沢大テキスト利用

2 すこしでもあって当然なたよるべき人・資がないので、そのことを仏が重い嘆くのである。

3 かたびら＝帷子、衣装のことともいうが、ここでは御帳のかたびらとあるから、仏像を収めておく厨子のカーテン。

4 こんなカーテンをもらっても生活の足しになるでなし、持って帰るのは、錦でも縫うように指示されたと感じて、現実的な頭が優先する女。

き所にも参りて申させければ、必ずなりけり。かやうにしつゝ、人の  
手よりものを得、よき男にも思はれて、たのしくぞ有りける。されば、  
その衣をばおさめて、必ず先途せんとと思ふことの折にぞ、とり出でて着け  
る。必ず叶ひけり。